ＳＮＳ教育プログラム　レッスン１　学習指導案

１　単元名　　　適切なコミュニケーションを考える

２　本時のねらい

他者と自分との考え方や感じ方には違い（ズレ）があることに気付き、その違いを踏まえたコミュニケーションが大切であることを理解する。

３　本時の展開

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **時間** | **学習活動** | **指導上の留意点** |
| 導入（10分） | ＜スライド1、2、3、4＞・本時の流れを確認する。・班分け、各班での役割(進行、発表係)決めを行う。＜スライド5、6＞アイスブレーキング（グループ活動による）Ｑ「夜遅い時間といえば何時？」 | ・全プログラム３回のうちの１回目であるため、【はじめに】を読み、当該プログラムの目的を理解する。・１班５～６人程度（少ないと違いが明確に表れない。）・時間の捉え方にも違い(ズレ)があることを理解する。ＳＮＳ利用にも関連づけながら、夜遅くまで利用する際の時間の捉え方に気づかせるとよい。 |
| 展開（30分） | ワークシート、無地のカードを配付する発問1：言われて嫌な言葉を選びましょう。また、その理由を考えましょう。・各自で言われて嫌な言葉を選ぶ。その後、グループやクラスで他の生徒の考えとの違いを確認する。・言われて嫌な言葉等が、それぞれ違うことを理解し、友人との感覚のズレを自覚する。＜スライド7、8＞発問2：「対面での直接コミュニケーション」と「ネット上のコミュニケーション（テキストコミュニケーション）」の違いを考えてみましょう。・ワークシートに違いを書く。・ＳＮＳ上のコミュニケーションではどのようなことに注意しなければならないかを考える。・「テキストコミュニケーション」の特性についてグループ内で発表し合い、ワークシートに記述する。・グループ内で考えを共有する。発表係は結果を発表する。＜予想される生徒の記述＞・誰とでもつながる・一瞬で伝わる・真意が伝わらず誤解されることもある・データが残る・画像などを使える　等々＜スライド9＞「メラビアンの法則」について説明する。（コミュニケーションは言語情報だけでなく、非言語情報も非常に重要である。「何を言うか」も大事だが、それを「どう言うか」「どういう態度で」ということはさらに重要であると確認する。） | ・グループ活動のルール（４つの約束）を説明し、他の班員の意見を否定、批判せずに受容することを確認する。・それぞれ異なる言葉が書かれている５枚のカードを配付する。・発表させた後、クラス全体を集約し、感覚のズレに気付かせる。・感覚のズレに気付かないままテキストコミュニケーションを続けることが、トラブルにつながることに気付かせる。・「直接コミュニケーション」と「テキストコミュニケーション」について説明し、ＳＮＳ上のコミュニケーションはテキストコミュニケーションであることを確認する。・それぞれのコミュニケーションのメリット、デメリットを考えることで違いが明確になることを説明する。※生徒の発言は、板書する・コミュニケーションは言語情報だけでなく、非言語情報(表情やしぐさ、声のトーンや大きさ等)も非常に重要であることに気付かせる。・個人個人で感じ方の違い(ズレ)があることに加え、テキストコミュニケーションは直接コミュニケーションよりもトラブルが起きやすい要素が多いことを説明する。 |
| まとめ（10分） | ＜スライド10＞ワーク①、ワーク②を通して、・他者と自分との考え方や感じ方には違い(ズレ)があること。・テキストコミュニケーションは直接コミュニケーションよりも誤解が生じやすくトラブルになる要素が多いことを確認する。 | ・ＳＮＳ上のコミュニケーションでは、ネットの特性を理解し、更に自分の言動がどんな結果をもたらすかを想像し、適切に判断できる力を養うことが重要であることを理解させる。 |

４　教材　カード教材「自分と相手の違い」ＳＮＳノート（情報モラル編）26ページ（LINE株式会社）

　　　　　　https://linecorp.com/ja/csr/newslist/ja/2018/190

５　実践するにあたって

　(1) 概要

　　　①言われて嫌な言葉やされて嫌なことが自分と必ずしも同じではないことを体験させ、「感覚のズレ」がＳＮＳ等を利用して起こるトラブルの一因であることを理解させる。

 ②ネットでのコミュケーションはテキストコミュニケーションがほとんどであり、「メラビアンの法則」を紹介し、通常のコミュニケーションとの違いを理解させる。

○　テキストコミュニケーション

・・・文字のみによるコミュニケーション

○　メラビアンの法則

　　　　　・・・感情や態度について矛盾したメッセージが発せられたとき、人の受けとめ方に及ぼす影響の大きさについての実験結果。話の内容などの言語情報が７%、口調や話の早さなどの聴覚情報が38%、見た目などの視覚情報が55%の割合であった。

　(2) 基本的なスタンス

　　　・ＳＮＳ教育プログラムでは、機械技術、利用技術、法律等を教えるのではなく、コミュニケーション指導が中心であるという共通認識をもって実施する。

　　　・ＳＮＳやスマートフォンを使わせないということを前提としない。

　　　・「感覚のズレ」という言葉をキーワードとして用いる。

　(3）工夫するとよい点

　　　・「言われて嫌な言葉」については、挙手をすることで、「感覚のズレ」を視覚的に伝えることになる。ただし、その際、少数意見へのフォローが大切である。

　　　・ＳＮＳを活用するうえで、安全性を高めるために注意することについては、次の点が考えられたかを確認する。

　　　　　・投稿により自分自身が伝わるものである。

　　　　　・ＳＮＳやインターネットの技術が進化する中では、リスク等は想像を超える場合もある。

　　　　　・生徒によってＳＮＳの使い方が異なり、それがトラブルの元にもなり得る。

　　　・分からせることよりも実感させることが大切。教え込もうとしなくてもよい。

　　　・ＳＮＳやインターネットで困っていることがあれば、相談に乗ることを伝え、一緒に考えていく姿勢を伝える。

　　　・ＳＮＳに関して保護者とどのように話をしてきたかを確認してもよい。